

# エダマメ専用品種「サッポロミドリ」、その開発経緯について

研究開発本部 北海道研究農場 園芸作物・花卉研究 I グループ 早坂 政寛

## 1. はじめに

夏の風物詩として幅広い世代の方から好まれるエダマメ。古くから日本人にとって馴染みの深い夏野菜の一つですが、かつてはエダマメ専用の品種は数が少なく、在来大豆の一部をえだまめとして収穫していたのが一般的でした。大豆の一用途であったエダマメは、現在では野菜の一つとして認識される様になり、各種苗会社から専用品種が発表され続けています。

雪印種苗(株)はエダマメ開発のパイオニアとしてエダマメ品種の開発・生産・普及に情熱を注ぎ、全国の産地や作型に寄り添った品種を発表してきました。当社にとってエダマメは特別な意味を持つ品目であり、その原点となったのは1974年に発表した「サッポロミドリ」(写真1)の存在です。本稿ではサッポロミドリ生誕50周年の節目に、その開発経緯について紹介します。

## 2. エダマメ“専用”品種を目指して

戦後の復興間もない1950年代後半、雪印種苗(株)上野

幌育種場(現:本社)にてエダマメの試験研究がスタートします。その頃の当社の育種は飼料作物が中心で、知見や技術を園芸作物に応用しようとしている最中でした。当時のエダマメは夏場に収穫が可能な早生の大豆品種「奥原1号」などが広く利用されていましたが、当時の早生品種は褐毛で莢色が淡く、現在と比べると市場価値は低いものでした(写真2)。そこで早生性を有し、白毛・濃緑・大莢と市場価値の高い品種の育成を目標に、当社のエダマメ育種が幕を開けたのです。

## 3. 開発の難航と転機

当時の試験成績資料からは大豆品種や各地の在来種について細かく特性を調査し、目標に沿った育種材料を探索していた様子が伺えます。「サッポロミドリ」発表以前にも当社の早生品種はありましたが、目標を十分に満たす開発は難航していました。そんな中、北海道立農業試験場北見支場(現:北見農業試験場)より大豆品種「北育1号」が発表されます。大豆品種で



写真1 当時のリーフレット

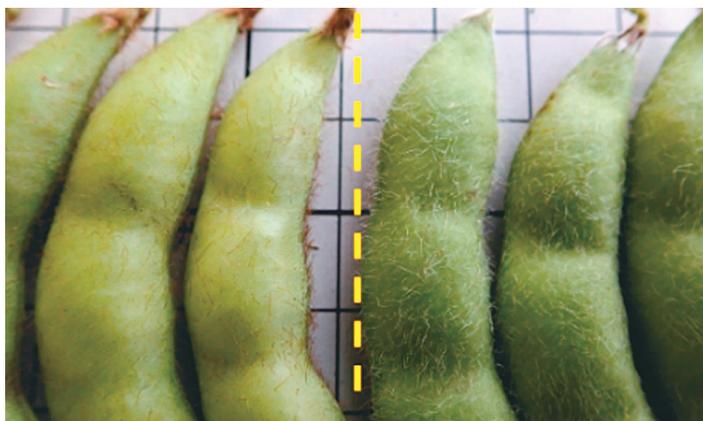
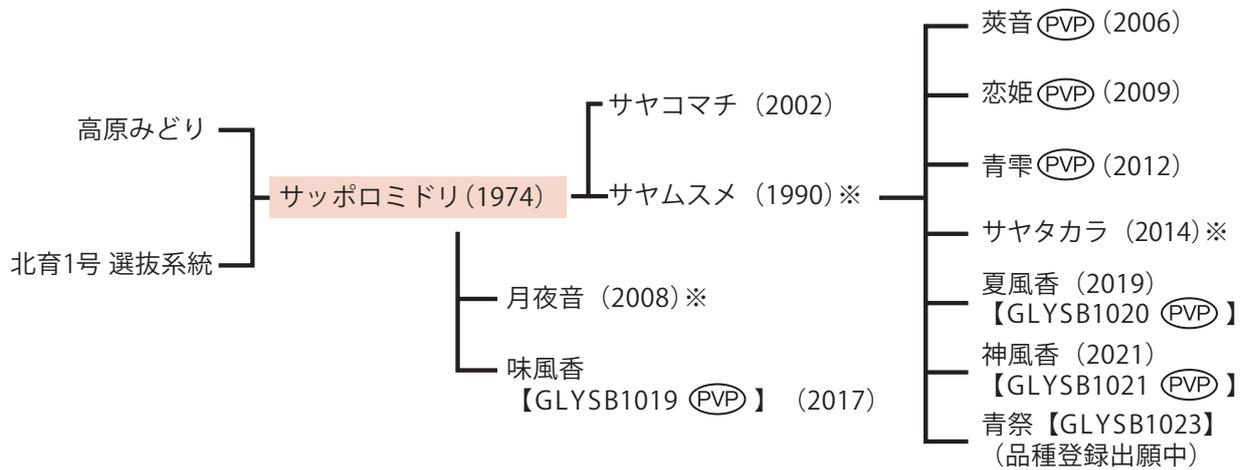


写真2 茶毛種(左)と白毛種(右)



写真3 故・中原忠夫



( ) は農産種苗法もしくは種苗法による登録年を示す。  
 ※但し、サヤムスメ、月夜音、サヤタカラの( ) は一般販売開始年を示す。  
 本図中の名称は品種名を表す。品種名と別に商品名が設定されている場合は【 】内に品種を示す。

図 サッポロミドリを中心とした系譜図 (交配の片親を除く)

は珍しい白毛の特性を有しており、開発目標にマッチした育種材料でした。そこで食味の良い早生・褐毛の「高原みどり」を母、そして「北育1号」の選抜系統を父として、後に「サッポロミドリ」が選抜される交配が当社の故・中原忠夫(写真3)によって行われます。時は1963年、日本では初の長編アニメ「鉄腕アトム」が放映を開始した年でした。

## 4. サッポロミドリの誕生

交配後、その後代から目標形質を持つ個体の選抜が進められます。一般的な早生性、白毛は潜在的形質であるため、初期世代でどちらの形質も有する個体が現れる確率は低いものでした。加えて大莢で濃緑色、かつ食味に優れた特性も有する個体となると、膨大な数の個体展開と選抜調査が必要とされます。今ほど農業機械が進歩していなかったことも考えると、限られた環境下でこれらを選抜するのは至難の業だったと想像できます。何世代もの選抜と試験、採種を進め、交配から11年後の1974年、ついに「サッポロミドリ」として種苗名称登録されます。「奥原1号」並の早生性に加え、白毛で濃緑の大莢、3粒莢の割合が高く、食味に優れるという特性を持った「サッポロミドリ」は夏場に収穫できる早生品種の中でも高い品質が認められ、全国に広く普及していきました。

## 5. 引き継がれるサッポロミドリのDNA

現在当社が販売しているエダマメ品種は17品種、うち11品種は「サッポロミドリ」がルーツとなります(図参照)。「サッポロミドリ」をベースに農業特性の改良、付加価値の向上を目的とした開発が歴代の開発担当者によって行われてきました。現在は圃場選抜に加えてDNAマーカーを利用した開発を進めていますが、エダマメとして優れた形質や食味についてはその根本に「サッポロミドリ」があり、今後発表していく品種にもそのDNAが引き継がれていくことでしょう。

## 6. おわりに

産まれた地名「サッポロ」をその名に冠し、発表から50年後の現在でも札幌伝統野菜や冷凍加工用途として皆さまからご愛顧頂いている「サッポロミドリ」。

戦後まだ貧しい日本において、日本人の食卓が豊かになっていくことを信じ、エダマメの新しい市場開拓を成した故・中原忠夫と関係者、そして生産者の方々に最大限の敬意を払い、当社は今後もエダマメの開発・生産・普及に会社一丸となって尽力していく次第です。